

む 難しく考えぬほど 妊娠し
 《不妊症》

「あなたからはフェロモンが感じられない」尊敬する先輩の先生が不妊症の患者さんに向かって言った言葉です。失礼じゃないかと一瞬ドキッとしますが、そこは先生と患者さんの信頼関係が構築されており、長年の経験・見識から滲み出るオーラで、患者さんも納得なのでしょう。近年「患者さま」とか「診させていただきます」などと宣ふ若い医師がいますが、これでは病気は治りません。この先生のように尊敬に足る医師から、上から目線で言われた方が患者さんは幸せだと思います。この先生は、もっと艶やかに匂いなども工夫するようアドバイスしたとのことでした。

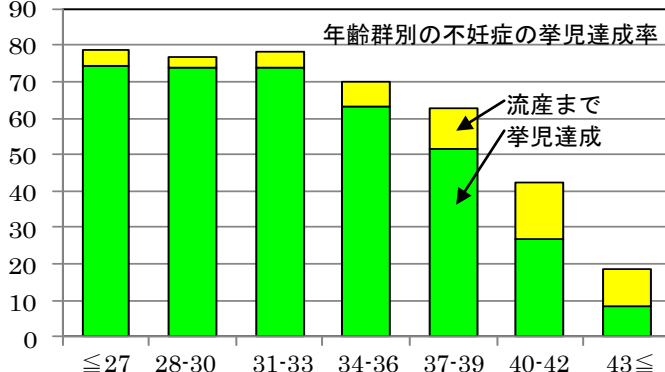
人間の営みの中には、大脳皮質での高次の脳機能を駆使する人間ならではの作業から、肉体中心の動物も行っていることまで様々なものがあります。技術者が新製品を開発する営みが前者なら、妊娠することはさながら後者ということができましよう。断っておきますが、どちらも人間にとって大事な営みで、いずれが上位というわけではありません。

不妊症の方は一般の女性に比べて、専門職などに就かっている知的な方が多い印象があります。これまで莫大に勉強し努力を重ねて今の地位を築いてきた、その流儀を妊娠に対しても行ってしまう。インターネットなどで情報を沢山集めて研究すれば妊娠するものではありません（医療者は日々勉強ですが）。それよりもまずは夫婦仲良くすることです。お互いを尊敬するとともに、先の先生の言った通りいつも魅力的でいるよう努力しましょう。不妊外来では我々の見立てと実際の排卵日が違っていることも多々ありますが、仲の良いご夫婦ならその日も性交渉をされていて妊娠が成立したりします。

妊娠のしやすさは明らかに年齢に反比例します。図は当院の不妊外来を受診された方の初診時の年齢群別に、どれくらいの方が出産に至ったかを示しています。30代前半までなら大多数の方が赤ちゃんを抱くことができます。40代では妊娠しても流産に泣かされることも多く挙児達成率は低くなります。もちろん、スタッフ一同、患者さんとともに頑張っており、40～42歳でも何とか26.9%の方が出産に至っています。

女性が30歳までに最初の出産を、35歳位で最後の出産をする。そして40代後半～50代には子どもも手を離れ管理職としてバリバリ仕事をする。そういう社会の到来を期待します。

不妊症のシンボルでもある基礎体温は診療の参考になり有用ですが、つけることにストレスを感じるようなら休んでもかまいません。夫婦仲良く肩の力を抜けば近い時期に赤ちゃんがやってくるでしょう。



う 産んだ人母であること真理ない
 《代理出産》

生殖医療の進歩は、通常ではありえない妊娠を現実のものにしています。卵子が無い機能が低下した女性に対する卵子提供や、子宮を失くして子どもが産めない女性に対する代理出産などです。私共は生殖医療従事者の端くれとして、不妊治療とは「夫の精子と妻の卵子による受精卵が妻の子宮で妊娠することを助ける医療」と認識していますので、この手の行為を不妊治療とは認めていません。手でボールをゴールに投げ込んでもサッカーとは言わないのと一緒です。もちろんわが国ではこれらは禁止されています。

しかし、海外で卵子提供を受けられた野田聖子衆議院議員には心を打たれました。第三者から提供された卵子と夫の精子で体外受精させた胚を自身の子宮に移植して妊娠し出産されました。自分自身のDNAを受け継いでいない子どもを、50歳での出産というリスクを冒しても「それでも私は産みたい」とする情熱はすごい一言です。

一方、代理出産といえはタレントの向井亜紀さんが思い起こされます。自身の卵子と夫の精子で体外受精した受精卵を、第三者（代理母）に妊娠・出産してもらったものです。わが国の法律では「産んだ人が母親」ですので、向井さん夫妻は遺伝的な親でありながら、子どもは養子となっています。

「生みの親より育ての親」と申しますが、現代では生殖医療の進歩で、その生むという過程がさらに「生み」と「育て」に分けうることとなったのです。すなわち、卵子の主が「生みの親」であり、子宮で胎児を10カ月育んだ人が「育ての親」です。子どもが自身の血(DNA)を受け継いでいる事実はもちろん尊いですが、しかし、約0.1mmの受精卵と精緻かつ強固に結合してあんなに大きな胎児となし、最後に陣痛で押し出してこの世に送り出す子宮の存在はこれまた大きく、母性の原点ここに在りの感があります。卵子よりも子宮すなわち、「生みの親より育ての親」は、ここでもまた真なりです。したがって自身の子宮で赤ちゃんを育み、お腹を痛めて産んだ(帝王切開だとしても)野田議員はまさに実母と呼ぶに値すると思います。

「産んだ人が母親」という民法の規定(実際はこういう条文があるわけではなく、判例で述べられているようですが)は、生殖医療を想定していなかったのではなく、生殖医療全盛の現代でもなお真理だと思っています。それは子宮が受精卵を胎児に育て上げる大きな役割を果たしているという産科学的見地からも裏付けられているのです。

